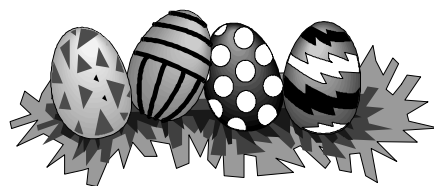


# ドナウ通信

No. 55

## 目次

特集	補習校か、日本人学校か		
	ブダペスト補習校の今後について	横山 佳弘	2
	これからのブダペスト日本人補習授業校の展開について	吉原 稔祐	5
随想	「ハンガリーあれこれ～三年半の駐在を終えて～」	菱木勤治	13
	「あぁ、我が青春のハンガリー」	芝下 直子	16
	「泥かぶら 友人から聞いた佳作の紹介」	菱木 紘子	21
	「自己満足的葡萄酒生活」	恒松 孝一	23
補習校児童作文			26
	「かけがえのない補習校」	小学六年 上原 康士朗	
	「六年間の思い出」	六年 小野田 陽	
	「ハンガリーに来て」	六年 上坂 桃	
	「小学校生活六年」	六年 栗田 晃孝	
	「いろいろあった六年間」	六年 清水 郁馬	
	「お父さんとお母さんに」	六年 古川 友梨	
	「補習校での三年間」	六年 吉原 翼	
	「卒業」	中学三年 上原 彩香	
	「長かった三年間」	三年 本 貴之	
映画時評	「戦場のピアニスト」	盛田 常夫	31
ハンガリー日本人会事務所移転のお知らせ			36
会社近況	デンソー・ハンガリー 高坂 典孝		36



## 特集

### 補習校か、日本人学校か

#### ブダペスト補習校の 今後について

補習校運営委員長

横山 佳弘

現在、ブダペスト日本人補習校（以下、補習校）は準全日制補習授業校というカテゴリーで文部科学省から教員を一名派遣頂いております。

しかしながら、現在の補習校が文部科学省の定める準全日制補習授業校の基準を満たしておらず、ここに来て小泉首相の『聖域なき構造改革』というトップダウンによる財政見直しに当補習校も引っかけかり、このままの体制では派遣教諭打ち切りとい

う瀬戸際まで追い込まれました。参

考ですが、準全日制のカテゴリーでは欧州においては当ブダペスト補習校のみで、世界的にみても生徒数六〇名以上で準全日制なのはブダペストだけです。（他の準全日制補習授業校はすべて三〇名以下で基準を満たしているときいております）

幸い今回は、大使館のご尽力、また父兄からの熱意（年末に遠山文部科学大臣宛てに嘆願書送付）が伝わったのか、吉原先生の後任に加茂先生が四月より着任されることになりました。

ただ今回の派遣決定については、文部科学省より条件がついており、このままの業態を続けるなら（基準を満たさない準全日制の継続）、次回の教員派遣は打ち切るというものです。要は、今回の派遣決定は、『いきなりの派遣打ち切りは学校運営に支障来たすだるうから 今回派遣教員任期二年の間に将来の方針を決めな

さい』という猶予期間です。

#### 一．準全日制補習授業校の設置 基準と現補習校の業態

準全日制補習授業校とは、全日制日本人学校（以下、全日制）へ移行する前段階での設置措置で、適当な国際学校が存在せず且つ日本人子女が少ない等の理由で全日制開校基準を満たさない場合に創設されるものです。

年間授業日数についても、各学年一七五日以上が規定されております。これに対し、当地ではアメリカンスクール等国际学校が存在する年間授業日数は一二〇日前後とこの二点が大きく抵触するポイントです。特に 年間授業日数について、一七五日確保するには ほぼ四日/週の授業実施が必要で、夕方までの国際学校終了後、現状約二 三日/週でも体力的な負担が大きいだけに（特に低学年児童）これ以上の授業日数

増加は不可能と判断せざるを得ませんでした。

## 二・今後の選択肢

考えられる選択肢として以下の業態があります。

全日制への移行（生徒・児童数三〇名以上確保が必要）

現行通りの補習校（ただし、日本からの派遣教諭なし）

補足として、 について全日制の学校を設立してもその中に一日/週

（土曜日）だけの補習校併設は可能、また については 現体制（二

三日/週）維持する為には、派遣教諭打ち切りにより専任講師増員要

（授業料UP）、または現行授業料維持するなら授業日数減を考える必要

があります。



## 三・メリット・デメリット

全日制を選択した場合のメリットとしては、

文部科学省から一〇名程度教員が派遣され、全く日本と同じ教育課程での授業実施が可能

日本から転入してきた生徒の精神的・身体的負担が小さく、スムーズに適応可能

小学校、中学校の卒業資格があり、スムーズに日本の学校に進学できる。

進路指導、教育相談等が充実する。国際学校+補習校に比べ、授業料

負担が軽減される  
といったことが、考えられます。

しかし一方、全日制通学となると、国際学校へ通学できない（せつかく外国にきているのだから、外国語を習得させたいという希望）、日本に帰国後編入・受験でハンディキャップが大きい（海外で国際学校に通学していた場合、優先的に入学できる制度を持っている学校があるが、全日

制通学の為その特別枠が使用できないと塾等に通り日本で受験勉強している子供に勝てないとい危惧）というデメリットが考えられます。

## 四・アンケート

そこで年末現在補習校に通われている児童・生徒のご父兄の方にアンケートを取りました。

結果は、

一位 現行通りの補習校を希望

六二%

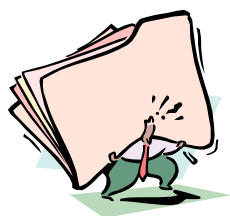
二位 全日制を希望

三〇%

三位 その他

八%

と現体制を支持される方が、過半数を超える結果となりました。



## 五・今後

ただ、補習校を希望された方の中でも一日／週の授業日数を希望された方も多く、また企業としても全日制がない為に駐在を断念若しくは単身赴任をせざるを得ないケースも有ると聞いております。

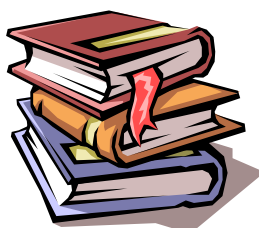
そこで、全日制若しくは国際学校＋補習校（一日／週）どちらかの選択肢があるということで、全日制設立（一日／週の補習校併設）を考えた場合、現実的に設立可能なのかどうか検討することになりました。

全日制となると現在の補習校（モリツ高校の仮住まい）は継続して使えなくなり、新たに適当な校舎選択から始めなければなりません。

四月からの補習校運営委員会のメンバー、新任の派遣教諭加茂先生、大使館の担当官が中心となってこの設立検討委員会を発足させ、校舎の選定 資金面 許認可等を検討頂き、可能と判断された段階で、設立意思

決定 設立準備委員会への移行  
なつていくと思ひます。  
また もし設立となつても 早く  
て二〇〇六年（平成一八年）四月開  
校が予想されます。

設立となれば、かなりの仕事量が  
予想され、運営委員会関係者だけで  
は負担が大き過ぎ、補習校に通学さ  
れている生徒の父兄、商工部会・日  
本人会のメンバーの方にもご協力を  
お願いすることになるうかと思ひま  
すが、その節は、宜しくお願ひした  
く、この紙面をお借りしてお願ひ申  
し上げます。



## これからのブダベスト日本人 補習授業校の展開について

吉原 稔祐

文部科学省から本校に求められていること、確認されたこと

- 1 現在の在外教育施設における準全日制というカテゴリーからの補習授業校あるいは全日制日本人学校のいずれかへの移行  
(期限：平成一五年一二月末までに決定し、在外公館を通じ、文部科学省へ文書で連絡)
- 2 在外公館(松本大使、伊佐敷公使、加藤理事官等)及び運営委員会の尽力で、文部科学省より次期教員が派遣されることが決定し、文部科学省からは、以下のように連絡があった。  
補習授業校(現行の準全日制ではない)  
次期派遣教員の任期二年、以後の

文部科学省からの派遣教員は打ち切り

\* 補習授業校になった場合、以後の派遣はないことを確認

日本人学校 次期派遣教員の任期二年～四年

以後、児童生徒数に見合った教員数を文部科学省から派遣

参考資料1

「故、準全日制のカテゴリーを変更しなければ、ならないのか？」

準全日制補習授業校の基準を満たさない為

準全日制補習授業校は、日本人学校へ移行する為の前段階の学校あるいは主にアジア、アフリカ等において、適当な国際学校が存在せず、日本人子女が少数な為、日本人学校の開校まで至らない場合に、日本人子女の教育権を確保するために創設された学校である為



参考資料2「準全日制補習授業校  
一覧 二〇〇三年一月現在」

- インド：チエンナイ補習授業校  
小・中在籍児童生徒数一一名
- ブルネイ：ブルネイ補習授業校  
小・中在籍児童生徒数七名
- メキシコ：グアダハラ補習授業校  
小・中在籍児童生徒数二六名
- ハンガリー：ブダベスト補習授業校  
小・中在籍児童生徒数六一名
- ニュージーランド：  
ウエリントン補習授業校  
小・中在籍児童生徒数一九名
- オマーン：オマーン補習授業校  
小・中在籍児童生徒数九名
- タンザニア：ダレサラム補習授業校  
小・中在籍児童生徒数一一名

・日本人学校と補習授業校の相違点 [ 授業日・時数例：小学部5年 ]

カテゴリー	週1回補習授業校	週2回補習授業校	全日制日本人学校
学校形態	小・中・高	小・中・高	小・中
授業日数	35日	90日	175日
授業日	小1～小3 火曜日 高等部 水曜日 小4～小6 木曜日 中学部 金曜日	小1～小4 火・金 小5～中3 月・木 (土曜日は授業なし) 高1・高3 水 高2 金	全学年 月～金
授業時間	全学年 16:00～19:00	小・中学部 16:00～18:30 高等部 16:00～20:00	日本の学校に準ずる
特別活動日	4カ月に1回程度	2カ月に1回程度	1カ月に1回程度
夏期集中授業日	なし	3～4週間程度	なし
授業形態	単式12学級	単式12学級	単式9学級
授業時数	105時間	300時間	945時間
教科等時数 [ 国語 ]	50時間	110時間	180時間
[ 算数 ]	50時間	110時間	150時間
[ 社会 ]		30時間	90時間
[ 理科 ]		10時間	95時間
[ 音楽 ]		4時間	50時間
[ 図工 ]		4時間	50時間
[ 家庭 ]		4時間	55時間
[ 体育 ]		8時間	90時間
[ 道徳 ]			35時間
[ 特活 ]	5時間	20時間	35時間
[ 総合又は英語 ]			110時間
授業料	200,000～250,000HUF	700,000～800,000HUF	400,000～450,000円
進路指導	保護者担当	保護者担当	派遣教員担当
卒業資格	なし	なし	有り
帰国子女受験において国際学校出身者を優遇する学校	東京学芸大学附属 / 国際基督教大学附属 / 桐朋女子 / 都立国際 / 南山国際 同志社国際 / 立命館宇治 / 関西大学附属 / 千里国際等 *ただし国際学校で、必要なグレードを修了しなければならない。 *事前に資格認定手続きが必要になる学校がある。 *他の国公立及び私立中学校、高等学校への編入学については、国際学校校出身者と日本人学校出身者は同じ条件となる。 *各学校及び都道府県によって、編入学条件は異なる。		
校舎等	モーリツ高校	モーリツ高校	校舎移転
教職員組織	非常勤校長 1名 専任講師 3名～4名 非常勤会計事務 1名	非常勤校長 1名 専任講師 4名～5名 常勤事務職員 1名	派遣校長 1名 派遣教頭 1名 派遣教員 約10名 専任講師 4名 常勤事務職員 2名
校舎借料援助金	5割	5割	6割
派遣教員の有無	なし (長期滞在者の児童生徒数100名以上で管理職1名派遣)		児童生徒数30名以上で必要数の8割派遣

## ・補習授業校への移行を選択

1 各学年週二回授業を実施する補習授業校を選択した場合に予想されること

派遣教員はいないが、専任講師を一名増員することで、現体制を維持できる。

授業日が週二回を維持する為、児童生徒もスムーズに移行できる。

週二回の授業実施により、日本の全教育課程の約五〇％を消化できるとともに、国語・算数（数学）に関しては、日本の学校における授業展開が可能である。

小学部一年～四年 国語・算数  
小学部五年～中学部国語・

算数（数学）・社会

長期滞在者の小・中学部児童生徒が一〇〇名を超えれば、文部科学省から管理職が一名、派遣される。

モーリツ高校を継続して、利用できる。

高等部・永住者・外国籍の児童生徒が、継続して通学できる。

外務省からの校舎借料援助金（校舎借料の五割）、講師謝金及び文部科学省からの教材整備事業については、継続して受けられる。

現体制から新体制への移行に時間はかからない。

エゴに関してほとんど変更せず済む。

補習校規約に関しては、部分改定で済む。

若干の授業の質的低下は否めない。専任講師を一名増員し、常勤事務員一名を確保するため、授業料が現在（576,000HUF）よりも少なく見積もっても三〇％は上昇する。「約700,000～800,000HUF」

専任講師の事務的負担が増し、勤務時間も増す。（現派遣教員の仕事を専任講師に振り分けるため）

非常勤の校長を依頼しなければならぬ。

運営委員会及び運営委員長の仕事量は多くなる。（各種公的提出書類、調査、依頼等）

進路相談等については、保護者の責任で実施するようになる。

派遣教員がいなかったため、大使館と円滑な連携が難しくなる。

小学校、中学校の卒業資格がない。授業料の減免制度は、廃止されるかもしれない。

二〇〇三年度より文部科学省より派遣される教員は、二年で打ち切られる。

2 各学年週一回授業を実施する補習授業校を選択した場合に予想されること

派遣教員はいないが、現体制で学校を維持できる。

授業日が週四日になり、事務日を確保することができるため、新規に事務員を雇用せずに学校運営ができる。

授業日が週一回となる為、児童生徒の身体的・精神的負担の軽減になる。

長期滞在者の小・中学部児童生徒が一〇〇名を超えれば、文部科学省から管理職が一名、派遣される。モーリツ高校を継続して、利用でき。

高等部・永住者・外国籍の児童生徒が、継続して通学できる。

外務省からの校舎借料援助金（校舎借料の五割）、講師謝金及び文部科学省からの教材整備事業については、継続して受けられる。

授業料が軽減される。「約200,000～250,000HUF」

現体制から新体制への移行に時間はかからない。

KHT に関してほとんど変更せずに済む。

補習校規約に関しては、部分改定で済む。

授業実施日が週一回になるため、

国語・算数の二教科の授業になる。

授業時数が三分の一から四分の一に減るため、自主学习によって日本の学習をしなければ、ならない。

一時間あたりの授業内容が二倍以上になるため、児童生徒の負担が大きくなり、当然、宿題量も増えることになる。

若干の授業の質的低下は否めない。授業料の減免制度は、廃止される。

収入が減るため、専任講師の給与が削減される。

非常勤の校長を依頼しなければならない。

運営委員会及び運営委員長の仕事量は多くなる。（各種公的提出書類、調査、依頼等）

進路相談等については、保護者の責任で実施するようになる。

派遣教員がいないため、大使館と円滑な連携が難しくなる。

小学校、中学校の卒業資格がない。

二〇〇三年度より文部科学省より

派遣される教員は、二年で打ち切られる。



参考資料5「ハンガリー国周辺の制補習授業校一部 二〇〇三年一月現在」

ブルガリア・ソフィア補習授業校	小・中在籍児童生徒数	四名	派遣なし
イタリア・ミラノ補習授業校	小・中在籍児童生徒数	九七名	派遣なし
ローマ補習授業校	小・中在籍児童生徒数	五〇名	派遣なし
ノルウェー・オスロ補習授業校	小・中在籍児童生徒数	二七名	派遣なし
スウェーデン・ストックホルム補習授業校	小・中在籍児童生徒数	八〇名	派遣一名
フィンランド・ヘルシンキ補習授業校	小・中在籍児童生徒数	三一名	派遣なし
ベルギー・ブラッセル補習授業校	小・中在籍児童生徒数	一五一名	派遣なし
ドイツ・ベルリン補習授業校	小・中在籍児童生徒数	六一名	派遣なし
シュツットガルト補習授業校	小・中在籍児童生徒数	八四名	派遣なし
デュッセルドルフ補習授業校	小・中在籍児童生徒数	六九名	派遣なし
ミュンヘン補習授業校	小・中在籍児童生徒数	二二一名	派遣なし
ハンブルグ補習授業校	小・中在籍児童生徒数	五〇名	派遣なし
フランクフルト補習授業校	小・中在籍児童生徒数	一七八名	派遣なし
フランス・コルマル補習授業校	小・中在籍児童生徒数	二三名	派遣なし
レンヌ補習授業校	小・中在籍児童生徒数	二八名	派遣なし
デンマーク・コペンハーゲン補習授業校	小・中在籍児童生徒数	三七名	派遣なし
スペイン・マドリッド補習授業校	小・中在籍児童生徒数	一一三名	派遣なし
スイス・ジュネーブ補習授業校	小・中在籍児童生徒数	一七〇名	派遣一名
チューリッヒ補習授業校	小・中在籍児童生徒数	六四名	派遣なし
オランダ・アムステルダム補習授業校	小・中在籍児童生徒数	一四九名	派遣なし
ポルトガル・リスボン補習授業校	小・中在籍児童生徒数	二四名	派遣なし
ルクセンブルグ・ルクセンブルグ補習授業校	小・中在籍児童生徒数	三七名	派遣なし
イギリス・ロンドン補習授業校	小・中在籍児童生徒数	一〇六八名	派遣四名
ダービー補習授業校	小・中在籍児童生徒数	一二五名	派遣一名

・全日制日本人学校への移行  
を選択

1 全日制日本人学校のみを選択した場合に予想されること

文部科学省より多数教員が派遣され、全日制へ移行しても人件費に関しては、現在より若干高くなる程度ではないかと判断される。

日本と同じ教育課程で授業を実施することができる。

日本から転入してきた児童生徒の精神的・身体的負担が小さく、スムーズに適應できる。

外務省からの校舎借料援助金（校舎借料の六割）、講師謝金及び文部科学省からの教材整備事業については、継続して受けられる。

授業料は、週二回程度実施する場合に比べ、多少高くなるが、企業負担は国際学校に比べ、かなり軽減される。

参考資料 6 [ アメリカンスクールの授業料 ( 1USD = 120円 ) ]

グレード1～グレード5 ( 小1～小5 ) 12,100USD [ 1,452,000円 ]

グレード6～グレード8 ( 小6～中2 ) 13,500USD [ 1,620,000円 ]

グレード9～グレード12 ( 中3～高3 ) 14,300USD [ 1,716,000円 ]

\* 入学金 ( 共通 ) 250USD [ 30,000円 ]

\* 施設費 ( 共通 ) 2,500USD [ 300,000円 ]

派遣教員がいるため、大使館と円滑な連携ができる。

小学校、中学校の卒業資格があり、スムーズに日本の学校に進学できる。一つの学校に在籍するため、児童生徒の身体的・精神的負担が軽減される。

非常勤の校長を依頼しなくても済む。

( 校長及び教頭が管理職として派遣される )

運営委員会及び運営委員長の仕事量はかなり軽減される。

( 各種公的提出書類、調査、依頼等は、派遣の管理職が行う )

放課後に様々な体育的・文化的活動をとり入れることが可能である。

進路指導、教育相談等が充実する。

現在の専任講師を継続して雇用できる。

文部科学省より教員が継続して派遣される。

KHT から学校公益法人への移行

が可能である。(各種特典を受けることができる)

日本人学校への移行に関して、煩雑な手続きが必要となる。

参考資料7「日本人学校の設立要件」

設置主体が現地日本人会等在留邦人の組織する団体であり、公共性が保たれていること

一定数以上の児童生徒が在留し、将来とも在留する見込みがあること

(三〇人以上が現に在留していることを一つの基準とする)

各教科、道徳、特別活動及び総合的学習の時間などが国内の小・中学校とほぼ同様であること。

学校開設及び運営上において財政面での見通しがあり、学校設置について現地の在留邦人社会の同意が得られていること。

モータリツ高校を継続して利用できないため、条件に合致する新校舎を探し、契約しなければならぬ。

プール、運動場等の設備がそろっている物件を探すのは困難である。

国際学校に通う長期滞在者や高等部、現地校に通う永住者、ハンガリー国籍の児童生徒の就学の機会が奪われる。

国際性を培うための工夫が必要になる。

現在国際学校に通う児童生徒が日本人学校に入学した場合、英語力を保持・伸長を図らなければならない。

(総合的学習の時間、選択教科等を利用して)

英語の学習時間を小学校三年～六年で最大週三時間、中学校一年で週七時間、中学校二年で八時間、中学校三年で一二時間とることができる。

参考資料8

「総合的学習の時間、選択教科の時数」

小学部三年 総合的学習

- 一〇五時間(週三時間)
- 四年 " 一〇五時間(週三時間)
- 五年 " 一一〇時間(週三時間)
- 六年 " 一一〇時間(週三時間)

中学部一年 総合的学習

- 一〇〇時間(週三時間) 選択
- 三〇時間(週一時間) 計週四時間
- 【英語(外国語) 一〇五時間(週三時間)】

中学部二年 総合的学習

- 一〇五時間(週三時間) 選択
- 八五時間(週二時間) 計週五時間
- 【英語(外国語) 一〇五時間(週三時間)】

中学部三年 総合的学習

- 一三〇時間(週四時間) 選択
- 一六五時間(週五時間) 計週九時間
- 【英語(外国語) 一〇五時間(週三時間)】

日本人学校設立資金として、企業から多額の寄附金が必要となる。

寄附金額については、校舎が賃貸か買い取りか、また賃貸物件によって変わるため、現時点では予想できない。ただ、校舎を賃貸にする場合は、五千万円～一億円程度初期投資等に必要ではないかと思われる。（主な必要経費の六割は外務省から補助される。）

日本人学校設立までに時間を要する。（二年～三年）  
補習校規約の全面改定が必要となる。

KHIT に関して、かなりの変更を要する。



## 随想

### ハンガリーあれこれ

#### 三年半の駐在を終えて

菱木勤治

三年半のハンガリー駐在を終えて三月末、帰国する。当然ながら、いろんな出会いがあり、楽しいこと、うれしいことはいっぱい、いやなことも少しは体験した。よく外国駐在した人がその国を手放して誉めるのを聞く。最近でも、ポーランド駐在者が「治安もいいし、労働者もよく働く」などとべた褒めしたレポートを見た。私には当国をあれほど誉めまくる文章はとも書けない。私は何から何までいいことづくめの国はないと思うので、そういう説を全面的には信用しない。

ハンガリーのいいことといえば、まず親切な人が多い。来てまもなく

の頃、道をきいたらとても丁寧に書き地図まで書いて教えてくれたのには感激した。日本にない習慣では、

オフィスのエレベーターで知らない人同士が乗り合わせても、「今日は」「さようなら」とさりげなく挨拶する。最初は面倒な気もしたが、なかなかいい習慣ではないだろうか。親子・家族関係の濃密さもすごい。ブダペストへ出てきている学生のほとんどは、週末田舎へ帰るそうだが、そんな濃密さが本当にいいのか、もっと親と自立した方がいいのではと考えたりもするが・・・

さて、私が悪いことの代表例ではないかと思うのは、交通マナー、ドライブマナーである。最初の頃は、青信号で渡っているところを平気で突っ込んでくる車にひかれそうになり、歩行者優先なんてこの国では通用しないことにびっくりした。でも、老人・妊婦や乳母車の女性が市電に乗るときに、さっと身近の人が席を

譲ったり、手伝うのは日本でも真似したいものだ。

ドライブマナーで毎日いらしたのには、次の三点である。皆さんはどうお考えですか。進路変更の信号を出さないで、右折・左折する人が多い。3車線の道路で一番左の車線を走っているのに、信号の手前になって右折しようと右側車線に変更する信じられない走りをする人がいる。バス路線を平気で走り、信号の手前で一般路線に割り込む。私は毎朝、この割り込みを「Vorosmarty ut」へ通じる長い坂を上がっていく交差点で目撃する。帰りは、マルギット橋を通るが、市電の線路上を「Dob」や一般ナンバーの車が混雑を尻目によく走り抜けていく。交差点の信号が青でも進入すると途中で赤に変わり、反対側から青になって進入する車を邪魔するのが分かっていても、みんなが平気で突っ込む。自分さえ良ければいいらしい。

事務所の私の席からは、  
Bajcsy Zsilinsky ut と Andrassy ut  
が交差する信号が眼下によく見える。  
これまで余り気にならなかつたが、  
この一年ほど午後になると待機する  
車の警笛がうるさくなつた。なぜか  
というと、青でも目の前に突つ込ん  
だ車がいつぱい止まつていて信号を  
渡れない車が警笛を鳴らすのだ。ハ  
ンガリーでも、我慢できない人が多  
くなつたようだ。信号に突つ込んで  
も一分程度しか早く着かないのに、  
なぜみんな自分のことしか考えない  
振る舞いをするのか、私は呆れて見  
ている。

いろいろあつたが、何が良かった  
といつて真つ先に上げたいのはオペ  
ラなどをしつかり楽しんだことであ  
る。チケットは日本ではおそらく一  
〜三万円もするものが、ここでは五  
〇〇〜六〇〇〇円で十分だ。われわ  
れ夫婦は、一定期間中でみればオペ  
ラとバレエの鑑賞回数最多を記録し

たのではないだろうか。シーズン中  
は週一回は行つたし、週二回のこと  
もあつた。今年の一月のある週には、  
エルケル劇場だけで三回通つた。内  
訳はオペラ一回、バレエ一回、伝統  
舞踊一回だ。

オペラはやはりイタリアもの、そ  
れもベルディーがいい。ワグナーは  
余りにも莊重で、好きになれない。  
バレエはどれも良かったが、エルケ  
ルでかかる「ゾルバ」はギリシャ・  
メロデーが多用される現代バレエ  
で、一番思い出に残つた。夏場には  
マルギット島の野外劇場でウクライ  
ナバレエやスペイン舞踊などを楽し  
んだ。

オペラ鑑賞など、日本へ帰つたら  
ほとんどできないだろう。とにかく  
チケットが高いし、買うのも手間ひ  
まがかかるからだ。それを思うと帰  
るのが嫌になる。もう一ついやにな  
る大きな理由がある。こちらでも新  
聞や TV でいやでも目につくが、

日本では二〇年前、三〇年前には考  
えられないような事件や事象がしば  
しば起こるからである。できればそ  
んなものを見たくも、聞きたくもな  
いが、帰ればいやでも余計目につく。

最近の事件でいえば、幼児の虐  
待・餓死事件、セクハラした先生を  
女子中学征が警察に訴え、先生が逮  
捕されるとその子が周りからやりす  
ぎと批判される、万引きした中学生  
を書店主が警察に突き出そうとして  
その子が逃げ、電車で轢かれて死亡  
すると、これもやりすぎと追及する、  
など常識では理解できないことが多  
すぎる。

もちろん、もっと基本的なところ  
で汚職が絶えない国会の先生、改革  
も経済再建もできない政治家、他国  
ではデモや集会で意志表示するのに  
何があつてもひたすら我慢の国民と  
これも欧州でみていると、「不思議の  
国」である。つまるところ、私は日  
本も種々の問題のかなりの部分は、

政治家もわれわれ国民も世界に通用する人間観を持っていないためではないかと思う。まともな人間観に立ち、国がしっかりした将来ビジョン、どういう国を目指すかという哲学を持って、努力すればもつとずつとい国になっていたはずだ。

こういう議論を始めると切りがない。私がちらに来る前九八年に福井新聞のコラムに書いた小論を以下に紹介して終わりたい。そのタイトルは、「仏つくって魂入れず」である。

基本的人権の尊重、国民主権、平和主義の三つの基本原理を基調とする現行憲法は、世界に誇るものだ。制定後しばらくは社会でも、学校でも憲法の崇高な理念の基づく国造りに励もうという雰囲気は広範にみられた。しかし、昭和三〇年代以降、高度経済成長と軌を一にして、憲法を軽視・無視する歴史が続いてきたといっても過言ではない。今や憲法はあちこち虫食い状態で、みるも無

惨な姿をさらしている。

憲法の空洞化は、いじめや不登校が自然な状態になってしまった学校で最も顕著だ。教育の基本は子供の潜在能力を伸ばし、自己開発の意欲と能力を育てること。だが、憲法に違反しかねない長髪禁止、靴下の色規制などごまごました校則でしぼり、詰め込みと偏差値によって子供の内発的動機を抑え、自分の頭で考え、自分の言葉で他人と議論し、人間と社会のあり方を考える理想の教育とは対極にある。

薬害エイズ、水俣病などでは人命より企業利益が重視され、多くの公害でいやというほど学習したはずだが、ダイオキシン規制ではまたも人命軽視が前面にでてしまった。弱者（女性、子供、障害者、）への差別解消の歩みは遅々として進まず、外国人、特に在日韓国・朝鮮人の人権は不当に軽視され、公務員にもなれない。社員が長時間残業で過労死して

も因果関係を認めない企業、行政と癒着し接待を繰り返す金融企業、むやみに選挙資金を使い、地元への利益誘導しか考えない政治屋。日本を法治国家と称すのはいささか気恥ずかしい。

どんな立派な憲法や法律があつても、国民が自発的に守る意志を持たなければ、法治国家は成立しない。「法律」には国民が共有する伝統や慣習、連帯意識を含む広義のソーシャルをも含めて考えたい。戦後五〇年、われわれは残念ながら、経済の規模・利益の追求にきゆうきゆうとする余り、国際的に通用するソーシャルの体系確立に遅れをとった。今そのひずみが噴出し、閉塞・低迷状況を招いている、といえるのではなからうか。



ああ、

## 我が青春のハンガリー

芝下 直子

私がハンガリーと関わり始めて、  
ちょうど今年で一〇年目になる。そ  
して、この春とうとう帰国すること  
になった。今回はその笑いあり、涙  
ありの一〇年間を振り返ってみよう  
と思う。

「なんでハンガリー語なん？」こ  
の質問は今まで何度受けたかわから  
ない。実際のところ、大学で専攻語  
を選ぶ際、当時エジプトに行きたい  
がために、タダで行けるであろう職  
業のツアーコンダクターに憧れ、ど  
うせなら英語やフランス語などのメ  
ジャー言語よりはマイナーで、それ  
でいて観光資源が多い国の言語を、  
ということではハンガリー語を選んだ。  
(今思えばアラビア語を選択する手  
もあったのだが)  
ところがハンガリー語を選んで後

悔したことは数知れず。それに今の  
私はツアコンでもなんでもない。授  
業でハンガリー語文法や歴史につい  
て勉強していても、大学の外でハン  
ガリー人に会うことも、ましてハン  
ガリー語を話すことも全くなかった。  
最初の頃は「ホンマにハンガリー語  
なんて存在するんやろうか、そんな  
言語を話すコミュニティが実在す  
るんやろうか」と疑うほどだった。  
必要性を感じられないのに勉強する  
のは辛い。そのことを痛感したのは  
阪神大震災の時だった。外大ならば  
はなのか、被災地に住む外国人のた  
めに通訳ボランティアの募集がきて  
いた。一年生ながら習った単語で役  
に立てることがあるかも、と応募し  
たが、「ハンガリー語部門の要請な  
し」とのこと。結局、通常の避難場  
所で生活することが困難な身障者の  
方々の特別避難所で介護ボランティア  
アすることになった。そこでは実際  
に自分が人の役に立てて、喜んでも

らえる、という現場があり嬉しかつ  
た。一方「それに比べて、ハンガリ  
ー語やって一体何になるんやろ」と  
真剣に悩み後悔もした。そして福祉  
関係の大学を受験しなおそうかと考  
えたほどである。そんな状態でほと  
んど学校にも行かず、バイトばかり  
していた娘を見かねてか、父親が「ハ  
ンガリーについて実際なんも知らん  
ままダラダラするんでなくて、どん  
な所かいつペン行ってきたら良い」  
と言ってくれたのだ。これは大きな  
転機となった。春休みを利用して、  
ハンガリーに二ヶ月間のホームステ  
イに出発することになった。普段無  
口な父が、生まれて初めての海外に  
一人つきりで行く私を、姿が見えな  
くなるまでずっとガッツポーズで見  
送ってくれた姿は今でも脳裏に焼き  
付いている。

いざハンガリーに到着して最初に  
思ったのは「ホンマにハンガリー語  
を話してる人がおるんや！」ってこ



と。そしていかに自分がハンガリー語を話せないかを痛感した。先ず聞き取れない。もつとちゃんと勉強しとくんだった、と自暴自棄になつてサボつていたことを後悔した。とにかく何とかしないと、つてことで毎晩ハンガリー語で日記を書いて、ホームステイ先の家族に添削してもらうことにした。ノートは真つ赤つか！家族は皆、理解不可能なほどのハンガリー語を丁寧添削してくれた。二週間ずつブダペスト・シヨブロン・ミシコルツ・デブレツェンの計四家族にホームステイしたが、シヨブロンで忘れ得ぬ事件が起こつた。毎回のように日記を添削してもらつていたが、ある日お父さんが「同じ間違いばかりして！ちゃんと添削した所を復習してるのか！（添削部分を指で押さえながら）どうだ、ここはどう言い換えるんだ？」と詰問した。私は答えられなかつた。ものすごく悔しかつた。頭

の中で（なんやねんクソオヤジめ！それならアンタは日本語でこれくらい日記を書けるんか？書けへんくせに人の間違いを責めるな！）とお父さんをののしる一方、こんなことも思つていながら、言葉で表現さえない出来ない自分の能力のなさに情けなくて涙がどんどん出てきた。悲しいやら悔しいやら、自分でも説明できない感情が押し寄せて、家族の前で泣きじゃくつた。でもお父さんのこの言葉にとても反省させられた。私の両親は、私がこんな風にただ日記を書いて添削してもらつて、自己満足するためだけに私をハンガリーに出してくれたんじゃない。もつと必死で勉強しないと、と姿勢を改めた。シヨブロンで家族とお別れの日、お父さんは私にその家の鍵をくれた。「直子はもう家族だ。いつでも好きなきに帰つておいで」と。これまた涙で顔をグシャグシャにして抱き合つた。デブレツェンの家族は日本

に興味深々でいろんなことを聞いてきては、私もたどたどしく必死で答えた。話はそれるが、それぞれのホームステイ先には一日千円という謝礼で契約して、二週間で一万四千円支払うことになつていた。九年前の一万四千円と言えば当時の物価でいえば、平均給料の二〜三倍はしたと思う。お別れの日、私がお金を渡そうとすると、お母さんとお父さんは言つた。「直子を通じて、私達は見もしない日本という国を知ることができた。それだけで十分だ。お金は受け取れない。」と。これまた号泣した。この時の四家族とは今でも連絡をとつている。

ホームステイを終え帰国した私は、打つて変わつてハンガリー語にのめりこんだ。「また行きたい、あの家族に会いたい、今度は色んなことを話したい」という思いを胸に勉強した。そして三年生が終わると一年間休学してハンガリー留学した。ハンガリー

一人で同じ大学の女の子と一緒に暮らした。日本人の留学生仲間・ハンガリー人はもちろん、クラスメートのオランダ人やイタリア人、イギリス人などの貴重な友達もたくさんできた。国は違ってもハンガリー語を共通語にして話す事もできる素晴らしさに感激した。とにかく無我夢中の一年だった。ハンガリー語を選択して後悔した事ばかりだったのに、その時にはもう「良かった。あの選択は正解だった。」と心から思え、留学させてくれた両親に心底感謝した。

留学から帰ると四年生で就職活動が待っていた。ハンガリーで水道水をガブガブ飲んでいたら私は見事に胆石がたまり、帰国するなり病気続きで入院。就職活動の出鼻を大きく挫いた。ハンガリー関係の仕事につくぞー、と張りきっていただけに活動も「ハンガリーに支店を持つ企業のみ」という極めて狭い範囲に絞っていた。それでも面接では「ハンガリー

語やって、何ができるの？女の子は駐在なんて行かされないよ」と冷たくあしらわれ、そんな調子で卒業間近まで内定は出ていなかった。「ハンガリーに懸けてきた私の大学生活何やったん？」と沈む私に、まともや父が言った。「どうせ卒業旅行でハンガリー行くなら、就職活動もしてきたら？」私は「えっ！ハンガリーで就職しても良いの？」と驚いたが、それもそうだ、早速、卒業旅行兼就職活動に再びハンガリーに降り立った。ところが最初からそう上手くはいかない。日系企業のリストを手に、片っ端から電話で自分を売りこむが、「募集はしていない」との残念な返事ばかり。絶望に泣きくれ、もう日本に帰ろう、と思った時だった。一度電話で断られたが、「一応連絡先教えて」と言ってくれていた会社から電話で「どう就職決まった？うちに会社見学来てみる？」と、これこそ神の声だった。社長にお会

いして話しているうち、あつという間に内定を頂いた。「現地採用で給料少ないけど、社会勉強のつもりで頑張りなよ」と温かいお言葉まで頂いた。そうして見事就職先を見つけて、嬉しい報告を持って帰国し、卒業式を迎える事が出来た。

ビザが下りハンガリーに戻り、某日系自動車メーカーで通訳として働くことになった私は、これまた自分のアホさ加減が身に染みた。文系の大学を出て自動車免許も持っておらず「リアドア」「バックドア」の違いもわからない私が、プレス・溶接・塗装・組み立てなど車の製造に関する通訳をするのだから分けがわからない。ハンガリー語どころか日本語さえも専門用語ばかりで理解できない。周りの日本人の方には、わかりやすい言葉で話してもらい、それを何とかハンガリー語に訳す日々。大変な迷惑をおかけした。そして、社会人になって初めてハンガリー語を

選択したことを後悔したのは、会議での初めての通訳の後だった。社長の立派な言葉も、私にかければ幼稚園児並みの語彙の羅列になつてしまふ。間違いないように訳そうと必死になり、ふと訳す時に口を止めて考え込んだ時、社長は自分が話したほうが早い、と判断され、英語で話し始めた。もう自分の存在を消したいほどの恥ずかしさだった。会議が終わり社長に謝り、一目散にトイレに駆け込みオイオイ泣いた。「なんて難しい言葉を選んでしまったんだろう。自分のアホさのせいで人に迷惑をかけるなんて最低だ……」トイレでひとしきり泣いた後、机に戻るとメールが届いていた、「良くやったね。頑張ったね。」これが未来の旦那様、今の主人からのメールだった。とても嬉しかった。あんな通訳でも認めてくれる人がいるんだ、頑張ろう、と。それから毎月の会議での通訳では、ハンガリー人に私の目立つ

た間違いを会議後に指摘してもらつたり、会計・生産・販売などのその都度必要な専門用語を頭に詰め込み、二歩進んでは一歩さがりしながら、ちよつとずつハンガリー人上司や同僚に「今回は前より良かったよ」と言ってもらえるようになっていった。ハンガリー人は本当に誉めるのが上手だ。人をやる気にさせるように上手に誉める。お世辞とはわかつていながらも、毎回の励ましは本当にありがたかった。そうやっておだてに載せられながら、成長させていだいた。数ある失敗の中でも大失敗は、ローカルTV番組での社長へのインタビューの通訳だ。司会者の「ハンガリー人の働きっぷりに対してはどうお感じですか?」との質問に対し、社長は「大変満足しています」と答えたのに、私は事もあろうか「もうたくさんだ」と訳してしまつたのだ!というのもハンガリー語では「満足する」と「たくさんだ、う

んざりだ」の単語は音が似ているので、焦って誤訳してしまったのだ。(やっけてしもた!)と言つた直後に気づいたが、司会者は「ああ、言い間違つたんだな」とくらいにしか思わなかつたようで、次の質問に進んでくれた。テレビ放映前にビデオを見せてもらったが、バツチリ誤訳で聴き取れ、上司も「まずいけど、外国人の通訳だから間違いだとみんな思うだろう」ということで納まり、そのまま放映されたが、今でも恥ずかしくて消したくても消せない間違いだ。

仕事で一喜一憂している傍ら、私生活でも大変化があつた。結婚する事になった。相手は同じ会社の駐在さんだ。結婚式は地元になんで工ステルゴム大聖堂で行つた(詳しくは『ドナウ通信』五二号を)。

会社で自分の力不足を嘆いても、家に帰れば全て受け入れてくれる人がいる、そんな毎日はとても幸せで、

仕事も家庭も順調だった。そしてまた大変化が訪れた。妊娠したのだ。出血があり入院したりしたせいで早速、産休に入った。そこからまた私のハンガリーとの関わり方は大きく変わった。それまでは会社と家の往復で、仕事を通じてのハンガリー人とのお付き合いだったが、四六時中顔を合わせては世間話したり、日本食・ハンガリー食を交換し合ったりする。近所づきあいが始まったのだ。これは子供が生まれて育児休暇中の現在も続いているがとても楽しい。近所のハンガリー人の子供達と普通に遊ぶ息子を見ながら、ハンガリー人のママ友達と井戸端会議する。ハンガリー人が「ええ！」とか「ゲエ！」とかいうウナギを味見させたり、寒天・おはぎなどの和風デザートを作ったり、家庭のグヤーシュをもらったり、病気の時は良い先生を紹介してもらったり。(ちなみに私の近所ではオムライス・杏仁

豆腐が好評だった)

そんなハンガリー生活もそろそろ終わりに近づいてきた。主人の帰任で、この春帰国する事になったのだ。振り返ってみれば、最初のホームステイで家族の一員として受け入れられ、体験したハンガリー人家庭の温かさ、留学時代に学生として見たハンガリー、社会人になって会社の中でハンガリー人との関わり方、結婚し子育てして主婦として関わったハンガリー、色々な立場で様々な顔を持ったハンガリーに出会えて本当に良かったと感じている。今そう思える事は、結局スタートでもあり、幾度となく後悔もした「ハンガリー語を選択した」というところから来ているのだと思うと不思議だ。私の人生の大イベントを幾つも体験させてくれたハンガリーに心から感謝している。そしてそのチャンスを与えてくれ、周りで温かく見守り、助言してくださった日本人の方々にも心

からお礼を言いたい。これからまだハンガリーで生活をされる方、良い事ばかりではないかもしれないけど、自分なりのハンガリーの良さを発見しながら素敵な日々を送ってください。

最後に、自分で希望してきたわけでもなく、ハンガリー語を勉強したわけでもないのに、いつのまにか言葉覚え、ハンガリー人同僚とも仲良く仕事をし、私と息子のハンガリー生活を支えてくれた主人に「五年間どうもお疲れ様」とこの場をお借りして言いたい。



泥かぶら・・

## 友人から聞いた佳作の紹介

菱木 紘子

私がハンガリーに来る前にいた福井の友人に、真山美保という児童作家で「泥かぶら」という佳作があることを教えられました。今回は、この作品をご紹介します。

ある村外れの大変貧しい家におばあさんと二人で住んでいる女の子がおりました。まん丸の顔には泥がつき、汚い着物を着て、余り風呂にも入れないのでしよう、薄汚れた格好でした。頭のとつぺんにちよんと束ねた髪の毛とその姿は、遠くから見ると、まるで葉っぱのついた泥だらけのかぶらに似ていることから、村の者たちは女の子が歩いていると、「泥かぶら、泥かぶら」と言つてはからかっていました。男の子たちからは、石をなげられたり、泥をひつ

かけられたりされていきました。誰も助けてはくれませんでした。でも女の子は負けずに立ち向かっていきました。

ある日、いつものように男の子たちのいじめに合い、喧嘩をして泣かされ、一人でえんえん泣きながら神社にやってきたときのことです。大きな石のところに、一人の老人が座っていました。この老人はずっと子どもたちの喧嘩を黙って見ていました。そして泣いている女の子に向かって、「一寸ここいらっしやい」と呼び寄せ、「お前はこの村で一番美しい娘になりたくはないか」と尋ねました。女の子は、もう二度といじめられたくないという思いから、「美しくなりたい」と泣きながら答えました。老人は女の子の泥と涙でくちやくちやくの顔を拭つてやりながら言いました。「どんなことがあつても、私がこれから言う三つのことをしっかりと心に留めて、それを行いなさ

い。一つ、いつもにっこりと笑うこと、二つ、自分は醜いということを決して恥じぬこと、三つ、これからは他の人の身になって考え、いろいろなことを思うこと。このことをしっかりと守れば、村一番の美しい娘になれるだろう。」と老人は泥かぶらに教えると、いつの間にかいなくなつてしまいました。

女の子は美しくなりたい一心で、それからというもの毎日毎日、老人から言われたことを守っていました。いつもの調子で、学校へ行く途中にいろいろと言われても「にっこり」笑い、何をすることも他人の身になって物事を考えるように心掛けたのです。やがて月日が経つにつれて、女の子の心からは憎しみが消え、その心は穏やかになっていきました。村の人たちも、女の子を暖かい目で見るようになり、「今日は農作業が忙しいから、赤ちゃんを代わりにみていてくれないか」、「法事がある

から、手伝いに来てくれないか」といった具合に、娘にいろいろなことを頼むようになりました。泥かぶらはいつものにこししながら「はい」と快く引き受け、頼んだ人の身になつて考え、一生懸命お手伝いしました。村の人たちは自分の家に何かがあれば「これを持って帰りなさい」、「お姉ちゃんの服が小さくなつたら、これを着なさい」と、食べ物や着物を与えるのでした。

やがて、たつた一人の身内であるおばあさんが亡くなつてしまいました。しかし女の子は、その後も村の人たちからかわいがられ、なに不自由なく幸せな日々を送ることができました。

ところがある年、日照り続きで作物が全滅、泥かぶらと仲のよい友達の家も、食べていくのに困つてしまいました。これ以上子ども世話をするのができなくなつた両親は、その子を売りに出さなければならな

くなりました。友達が売られていくことを知つた泥かぶらは、とても悲しみました。そしてその子をなんとか助けたいと、その子の代わりに自分が売られていくことを決心したのです。「私は今まで一緒に暮らしていたおばあさんが死んでしまい、一人ぼっちです。今となつては私が売られて行つても、誰も悲しむ人はいません。どうか代わりに私を売ってください。」泥かぶらはそう頼んで、人買いの人に連れていかれることになりました。

凶悪なことも平気であるこの人買いと旅路でも、泥かぶらは今まで過ごした村のことを楽しく人買いに話したり、夜になると着物を洗つてやつたり、「小父さん、疲れたでしょう」と言つては足を揉んであげたりするのでした。こうして旅の幾日かが過ぎ、ある朝いつものように宿屋で女の子が目覚ましてみると、傍に寝ていた人買いの姿はなく、代わ

りにきちんとたたんだ布団の上には紙が残されていました。手紙には有難う。お前のように美しい子を今まで見たことがない。家に帰るまでの旅費です。」と書かれ、お金が添えてありました。



## 自己満足的葡萄酒生活

恒松 孝一

ワインが好きである。今ごろワインなんて少し時代遅れかもしれないがマイブーム（これも古い？）というところか。こういう書き物などしたことがないので心に移り行くよしなしごとをそこはかとなく書きつくらせて頂く。

ハンガリーに来て二年、マイ・ワインブーム爆発の様を呈している。これは小生の赴任暦の賜物であろうか？

九一年から九七年までヨーロッパにいた。フランクフルトにアムステルダム。ワインには興味はあったが、日本食屋で焼酎&ビールで皆と騒ぐのが関の山。とても“ワイン”なんていうガラではなかった（勿論、今も似合っていない）。その後、突

然、中近東はドバイへと赴任。ドバイ - 砂漠のオアシス - では、日本人はお酒を飲める。ワインも酒類購入許可証を買えば、外人向けの酒店で購入可能である。しかし、面倒な手間がかかったり選択肢が少なかつたりする（中東の面白話をするときりが無い。また、その不便さは読者の想像に任せたい。その実際は決して貴方の期待を裏切つてはいないだろう）。いろいろ制約されると欲しくなるのが人間の常である。年に二回のリフレッシュ休暇（これが無いと家族は人生の目的を失ってしまつて中東では生きていけない）では毎回ヨーロッパを訪れ、アラブ人の如く、贅沢三昧で美味しいものを食べ美味しいワインを飲み、つかの間の極楽アラブ浄土を味わつたものだ（彼らとの本質的な違いは「本当のお金持ちかどうか」ということ位であった。そのせいで（？）未だに品位に欠ける）。

忘れもしない二 年の三月五日。ドバイでの四年目の赴任生活のためにVISA延長の申請をした次の日、社長に呼ばれた。「四月一日付でハンガリー。大至急、引継ぎに行くように」。そんなこと言われたつて昨日まで「翌年もドバイ」て言うてたやん。パスポートかてありませんヨ。とりあえず、パスポートが戻つてきて三月一五日にハンガリーに来た（この会社の人事の凄さを語り出すときりがないので、これも読者の想像にお任せしたい。とにかく凄いとだけ付け加えておこう。本当にスゴスギル）。仕事の第一歩、一通りマーケットを見て、「よしっ！赤ワインだ！！」。小生のウラ業務目標はワインライフ満喫と決まった。未だに本業の業務目標は定まらない（「ゴルフで百を切る」にしようかと考える今日この頃である。因みに読者の皆様のご推測通り、小生の仕事はワインとは全く関係ない。勿論、

ゴルフも違う)。

憧れのワインと共にするヨーロッパアンライフが始まった。ハンガリーでの最初のワインエリア訪問はエグリピカベルで有名なエゲルであった。二一年秋のことである(決意とは裏腹に実行には時間がかかってしまうのもアラブ人の常である)。地球の歩き方を見て、能書きだけ綺麗な「美女の谷」という横穴式住居群を訪れた。ここで美女とは全く縁も無い偏屈オヤジ原人の唱えるお題目を聞きながら試飲するのである。これが「そこそこイケル！」のだ。当時はそんなにワインの味も判らないので薦められるがまま二リットルばかり買った。この横穴式住居においては縄文式の土器にも劣るとも勝らない使用済みのペットボトルでワインを売ってくれる(せめて綺麗に洗ってくれていることを願う)。百力国以上の国を流浪させられている小生であるが、ペットボトルの「そのま

まりサイクル」は始めての経験である(ハンガリーの遅しさを恐るべし!)。また、少しお金を出すとプラスチックの香りがブンブンするお土産にぴったりの樽型の容器もある。臆病者の小生はハンガリーの遅しさにチャレンジすることを避け、ワインのプラスチック風味をチョイスした(一応、税制管理の為(?)の綺麗なシールを貼ってくれるのだが、それはなかなか真実味を帯びていてウレシイ)。

さーて、帰宅後飲んでみる。昼間の美味が無い!長い時間車で揺られた上に、興味津々の当家のご息様ご令嬢様の悪戯に怯えてワインが疲れてしまったのかも知れない。一日休ませてあげた。味見をしてみてもう一日お休みをあげることにした。プラスチック小樽の香りは強くなるが、あの「そこそこイケル!」は二度とは戻って来なかった…。「おひま」をあげた。

小生のワインめぐりは続く。わざわざ長距離をドライブなぞしなくとも、ブダペシュトにはスーパーマーケットという文明の都がある。あきらかに横穴式住居のオヤジ原人文明より進んでいるはずである。コラ文明、テスコ文明、オーシャン文明と高速一号線流域に栄える文明の都を訪れた。したりっ、有るではないか、ハンガリーワインブックに載っている有名ブランド達が…。カタチを重視する小生にとってはこのブランドがキーなのだ。片っ端から買う。兎に角値段の高いものから買う(やはり下品である)。お陰様でコラ文明の都では特典ポイントが大分貯まった(ここで重要なことは、こういう文明の都は街のワイン屋よりもはるかに値段が安いと言う点である)。

ワインの世界は「カタチ」に事欠かない。ワインそのものは勿論の事ながら、飲み方、色、香り。味わいの表現の仕方。注ぎ方に飲み方。ま



るで茶華道の世界である。勿論、道具もいろいろある。各種ワインにあった専用の形をしたグラス、デキャンタ。ワインオーブナーに専用冷蔵庫、等々（カタチから入る小生はすっかりワイン貧乏になった）。

面白いところでは香りの本というものまである。ワインの基本の香りが入った小瓶が五種類位はいつている、簡単に言えばワインの香水セットだ。誰が何の目的で買うのか？ 香水の代わりにワインのエッセンスを体に付けて歩くのだろうか？ 鹿の香りとか、木の皮の香りとかもあるのだが…（実は小生のワイン冷蔵庫の上で鎮座ましましています…）。

最後に教材について。これからワインを始めようとされる方には是非「カタチから入る」ことを薦めたい。これもワインの簡単な楽しみ方の一つである。教養高い筆者は、ワイン道を極めようとする志の高い方にお

勧めする参考書物として「ソムリエ」  
「舜のワイン」というコミック本を挙げる。また、漫画の「ソムリエ」を題材にSMAPの吾郎ちゃんが主演した連続ドラマの「ソムリエ」も実践的なアプローチが理解できると  
いう点で貴重な参考資料と言えよう。

今回、ひよんなきっかけでマイブームのワインに関して原稿を書くこととなった。個人的な趣味の域を越えようなどと大それた考えは毛頭なく、ただ好きだから楽しんでいく。楽しむためにワインを語っているというのが正確な表現であろう。それ故、文中の「多少のウソ」と「余りにも大げさな記述」も笑って、見習い「バツカスの戯言」とお許し願いたい。

ワインに関して書くつもりであったが、実はワインのことなどこれっぽっちも知らないことが今回の寄稿によって認識することができた。自己再認識の機会を与えていただいた

『ドナウ通信』に深く感謝する。  
\* バツカス：ギリシャ神話に出てくるワインの神様の名前（少なくとも、これは本当です）



## 補習校児童作文

### かけがえのない補習校

六年 上原 康士朗

ぼくは一年生から六年生までずっと補習校にいました。だから、先生は六回変わっています。

その中で、ぼくが一番感謝しているのは、園部先生です。あいうえお、もできなかつたぼくに、いろいろ教えてくれました。あいうえおもそうですが、他に本読みとか、たし算とか、たくさん教えてくれました。園部先生はこわい時も、やさしい時もありません。でも、ぼくにとつて一番いい先生だと思いました。園部先生のおかげで、勉強も少しはできるようになってきました。ぼくは、園部先生のことを一生忘れません。あんなにぼくのことを心配してくれた先生は他にはいないと思います。

二年生の先生は島田先生でした。

ぼくは、算数が苦手で、暗算が得意なりょう太君と島田先生は、どっちが暗算が得意か決めようとかいろいろ言っていて、ぼくと川辺さんはビリしました。それで、こんなこともしゃべりました。「あの二人は、試合しすぎだよねえ」などと、言いながら、二年生は楽しく過ごせました。

三年生の時は、坂井先生でした。スパルタでぼくに、教えてくれました。四年生・五年生・六年生はしゅりやくします。

今まで、皆さん、ありがとうございました。そして、中学一年生になってもよろしく願います。

### 六年間の思い出

小学六年 小野田 陽

ぼくは、四年生の時、ハンガリーに来ました。振り返ると、最初の頃

は、自分の性格をかくしていました。

でも、みんなが明るかったので、くしていた性格をすぐに出すことができ、今ではもう、性格のことなんか気にしないでみんなと遊んでいます。

この六年間でいろんな学校に行きました。オランダの学校で入学して、一年生の三学期に日本へ帰り、二年間はその学校にいました。

そのあと、四年生の時にハンガリーへ来ました。海外で入学して、そして、海外で卒業できるということ、が、けっこううれしいです。

ぼくが今まで通った小学校の数は四つです。これからも、もっといろんな学校に行きたいです。

今まで通ってきた学校の先生方には感謝しています。

先生方、そしてみなさん。今までありがとうございました。お父さん、お母さん。

今までありがとう。そしてこれからもよろしく。

## ハンガリーに来て

小学六年 上坂 桃

私は一年生から四年生まで日本で過ごしました。四年生の終わりに急にハンガリーに行くことが決まりました。何がなんだか分からないうちにアメリカンスクールと補習校での一年間が終わりました。特に初めての半年間は、ESLとホームルームの先生方にお世話になりました。だから、これからは、この先生方に恩返しまではいかないかもしれないけれど、今度は私が先生の手伝いをできたらと思います。

この六年間で私は、いろいろ変わったと思います。特にハンガリーへ着てからは、新しい楽器を始めたり英語を覚えたりして、とても楽しかったです。補習校では、仲川先生、吉原先生、島田先生、他の先生方、そしていろいろな友達に助けられました。もちろん私の両親にもた

くさん助けてもらいました。今まで私を助けてくれた人たちがいたから、今の私がいるのだと思います。中学では、勉強についていけない心配だけががんばって行きたいと思えます。

## 小学校生活六年

小学六年 栗田 晃孝

ランドセルをしょって、少しお兄さん気分になりながら入学し、ピカピカの一年生として、学校に通い始めたあの日から、六年になりました。僕は今、その小学校生活に終わりを近づけようとしています。その前に、小学校生活の中のいろいろな出来事を思い出してみたいと思います。まず、四年生で野球部に入部した時のこと。僕は、野球選手になることが夢で、小さい頃から、近所の公園で毎日のように野球をしていました。あの時から、仲間の大切さを覚

え始めたのだと思います。

また、五年生の時の自然学校。あの時、協力することで、いろんなことができると分かりました。とても、いい経験になりました。

泣こうが、笑おうが、小学校生活はもう、終わり。この経験をもとに、もっと自分の世界を広げていくように頑張りたいです。

## いろいろあった六年間

小学六年 清水 郁馬

今、僕の小学校生活が終わろうとしています。

この六年間ぼくにとっては、長いようで短い時間でした。入学式の日きんちようして出た自分、たくさん友達ができてうれしかった自分、ハンガリーに行くことが決まってわくわくするような、悲しいような気分だった自分、そして、ハンガリーに来ていろいろな体験ができた自分。

ぼくにとって一番好きだった自分はハンガリーの自分でした。そして日本で入学式を終えたのに海外で卒業式を終えるなんて不思議な気分にさせてくれたのもハンガリーの自分です。

そして、ぼくをハンガリーにつれて来てくれたお父さん、お母さん、ありがとう。それから、いろいろなことを教えてくれた日本の学校の先生方、補習校の先生方、ぼくのたくさんの方の友達。本当にありがとう。

### お父さんとお母さんに

小学六年 古川 友梨

この六年間をふり返ってみると、私にはたくさんのお思い出があります。悲しかったこと、うれしかったこと、そして、ここハンガリーでの思い出。それは、お父さんが私たちを車に乗せて、いろいろな所につれていってくれたことです。

そのおかげで、ハンガリーには、どういう古い建物があるかが、分かりました。夏休み、冬休み、そして春休みなどの休みの間に、いろいろな国に連れて行ってくれました。

私は、私たちを他の国に連れて行ってくれて、家族のために働いてくれているお父さんに、とても感謝しています。私は、お父さんに、これから私たち家族のために一生懸命働いてもらいたいです。

お母さんは、私たちのためにいつも食事を作ってくれました。そして、私に礼儀を教えてくれたり、私が苦手な算数で困っている時に、私に簡単に分かるように教えてくれたりしました。いろいろなことを教えてくれたお母さんにとっても感謝しています。これからは、お母さんにいろいろな事を教えてもらいたいです。今まで私のため、いろいろな事をしてくれてありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

### 補習校での三年間

小学六年 吉原 翼

小学校での六年間で、一番思い出に残ったことは、ハンガリーのブダペスト日本人補習校に来たことです。

僕は、四年生の一学期にこの学校に来ました。仲川先生が担任で、クラスは五人だけでした。日本の学校ではクラスは三十五人なのでびっくりしました。授業は三時間だけで、国語と算数の科目がありました。

六年生は島田先生が担任でした。とても厳しくこわかったけど、たっ球やバドミントンなど、いろいろなことをいっしょにやってくれました。授業ではおもしろいことをたくさん言ったり、よく難しい問題を簡単に言い直してくれたりしました。

僕は日本に帰りますが、先生方、お母さん、お父さん、本当にありがとうございました。日本に帰っても頑張ります。

## 卒業

中学三年 上原 彩香

私は、この補習校で、いろんな出会いをし、いろんな別れをしてきました。いつも決まったメンバーと、決まった場所へ遊びに行くのでした。その中の一人が帰ったとしても、また新しい人がくる、そんな繰り返しでした。

その中でもハンガリーに住んでいるのが一番長く、誰かに見送られるということもなく、「当分帰らないんだよね?」と勝手に決め付けられているのが私でした。

なんでも「長い」というのを理由にされ、責任重大の役とかをおし付けられて来ました。ちょうど今年度は中三だったという事で、まとめ役としてやらなきゃいけない事がいっぱいでした。中二をまとめるだけでも大変というのにそこに小学生が入ったときにはもう、パニック状態に

なり、時間内にまとめられずに先生に怒られた事もありました。

ある時は、長いから「長老」なんて呼ばれたりもしました。そして、またある時は小学生にもナメられているのか、文化祭で一回やっただけの役なのに「ジャイアン」と呼ばれたりもしています。ちよつと一回、そのジャイアンの怖さをわからせてあげなきゃな、と思っています。

こんな小学生と接するのも、みんなとバカな話をするのも、補習校が日本語で、年齢に関係なく気軽に話せる場所だからだと思います。学年が上がっていくにつれて、補習校に行くのがメンドクさい、なんて思う事もあるようになったけれど、行事とかでみんなと話したりしているとやっぱり、「補習校は楽しいな」と思えます。

私は、もともと顔が老け顔なのか、顔はそんなに変わってないかもしれません。でも、中身は成長したと思

います。それは、たくさんの人に出会って、いろんなものをもらったおかげだと思っています。本当にありがとうございます。

これから高校生になるという事で、高校生らしく、明るく頑張っていこうと思います。そして、もっともつといるんなものをもらって、成長していきたいと思います。

## 長かった三年間

中学三年 本 貴之

中学三年間はとても長かったように思える。中一のときのことなんてほとんど覚えていないほどだ。中一のときは、普通の学校に行き、普通に友達と遊ぶという、本当に普通の生活をしていた。しかし残りの二年間は、普通とはとても言えないものだった。

中一の終わりにハンガリーにきて、

今までの生活とは全く異なった生活が始まった。まずは、アメリカンスクールにはいるための、半年近くに及ぶ俗に言う浪人生活を経験した。その間は週に二回ある補習校に通っていた。しかし、その時中二だった僕のクラスには四人しかいなかった。八月の終わりから、アメリカンに通うことになったが、正直何もわからない毎日だった。特に何もやってないのに、毎日疲労困憊状態だった。それでも僕を毎日学校に行かせるものがあつた。それはサッカーだ。僕はサッカーを通して友達を作ることができたのだ。今思うと、中一のときにサッカーを真剣にやってよかったと思う。友達作りだけでなくサッカーは英語を覚えることにも役立った。

二、三ヶ月たってだんだん英語が聞けるようになった気がした。それでも毎日の疲れが落ちるといふことは無かった。それに週二回アメリカンの後にある補習校が、相当体にこたえていた。そのようなこともあり、毎週月曜日の夜は頭痛があつた。このあたりで気づいたのが、アメリカンと日本での宿題の違いだ。日本では毎日規則的な宿題をやっていたが、アメリカンは毎日違うものを出してくる。日本は質よりも量、アメリカンは量よりも質といったところだ。考えてやらないとできない宿題が多かつた。しかしここで大きな助けになったのが、アメリカンでの成績のつけ方だ。アメリカンでは日本と違い、絶対評価で成績をつけている。それのおかげでそこまで悪い成績をつけられることはなかつた。補習校のほうでは中三になり、日本では受験生ということになった訳だが、特に変化はなかつた。一方アメリカンではミドルスクール卒業ということ、卒業式があつた。しかしたいした実感はわかになかつた。ただ一学年あがるだけで、行く学校も、

友達も変わらないからだ。

今日は補習校の中学卒業を迎えることとなったのだが、アメリカンミドルスクール卒業時同様、正直全く実感は無い。もっとも、ここで卒業式を迎えることさえ夢にも思っていなかつたのだが。高等部になると授業日と授業時間が変わるだけなので、他にたいした変化はない。

でも、日本に帰国したときに、「中一のときとあまり変わってない」などと言われないよう、そして、「ハンガリーに行つて成長した」と言われるよう、この高校三年間を、すべての面で大きく成長できるように充実したものにしたいと思います。



## 映画時評

### 「戦場のピアニスト」

盛田 常夫

#### アカデミー三賞の群像

二 二年カンヌ映画祭のバルム  
ドール賞を受賞した *The Pianist*  
(日本上映題名「戦場のピアニス  
ト」)が、アカデミー賞の三部門を受  
賞した。ロマン・ポランスキー  
(Roman Polanski)が最優秀監督賞、  
エイドリアン・ブローディ (Adrien  
Brody) が最優秀主演男優賞、ロナ  
ルド・ハーウッド (Ronald Harwood)  
が最優秀脚色賞に輝いた。

ポランスキーの父はポーランド系  
ユダヤ人、母はロシア人でユダヤの  
血が混ざっている。フランスのパリ  
で生まれたが、反ユダヤ主義が勃興

したため、ポランスキー一家はロマ  
ーンが三歳の時にクラコフへ移住し  
た。両親はロマンが生まれる一年  
前の一九三二年に結婚し、母はアウ  
シュヴィッツの収容所で妊娠四カ月  
の身重のままガス室で殺害された。

ポランスキーは一九六 年代のア  
イドル女優だったシャロン・テート  
を二人目の妻に迎えたが、翌一九六  
九年のシャロンが妊娠八カ月の時に、  
ハリウッド・ヒルズのマンションで  
チャールズ・メイソンに属する狂信  
的な男に殺害された。母の死に続く、  
ポランスキーの二度目の悲劇であっ  
た。当時、このニュースはアイドル  
女優の猟奇的殺人事件として、世界  
に報道された。

スピルバーグはこうした悲劇に遭  
遇してきたポランスキーに、「シンド  
ラーのリスト」の監督を依頼したが、  
その内容があまりに個人的かつ苦痛  
であると断った経緯がある。ポラン  
スキーは今回の授賞式に出席してい

ないが、それは一九七八年の未成年  
少女への性的ハラスメントによって、  
米国への入国が禁止されているから  
である。

ブローディはアメリカ生まれのア  
メリカ育ちだが、父がポーランド系  
ユダヤ人で、母はハンガリー人の著  
名な写真家、スィルヴィア・プラッ  
キー (Sylvia Plachy) である。プラ  
ツキーは一九四三年にブダペストで  
生まれ、一九五六年にアメリカに渡  
った。学校時代にハンガリー出身の  
写真家アンドレ・ケルティース  
(André Kertész) に出会ったことが、  
写真芸術に向かうきっかけになった。  
一八八四年生まれのアンドレ・ケル  
ティースは一九一二年にパリに移住  
し、そこから一九三七年にニューヨ  
ークに移った。ライカの三五ミリカ  
メラを持って、フリーランスのカメ  
ラマンとして再出発し、ニューヨー  
クを拠点とする写真家として名声を  
高めることになった。プラツキーは

そのケルティースとニューヨークで  
出会い、写真家になる道を選択した。  
アメリカに育ったブローディはハン  
ガリー語を話せないが、母ブラッキ  
ーと度々ハンガリーを訪れている。

ハーウッドは英国を代表する現代  
の戯曲作家である。一九三四年にケ  
ープタウンで生まれた。一九八九年  
から一九九三年までイギリス・ペン  
クラブ代表、一九九三年から一九九  
七年まで国際ペンクラブ代表を務め  
た。一九九五年に上梓した戯曲  
*Taking Side* はドイツの作曲家フ  
ルトベングラーとナチをめぐる思想  
的かつ心理的な葛藤を抉る作品で、  
ハンガリーのアカデミー賞監督サボ  
ー・イシュトヴァーンが二一年  
にこれを映画化したことで知られて  
いる。その映画評は『パプリカ通信』  
臨時号(二一年八月)を参照さ  
れたい。

#### あらすじ

主人公のシュピルマンはワルシャ  
ワ・ラジオの常連ピアニスト。彼と  
家族の運命はドイツ侵攻によって、  
悲劇的な結末を迎える。一九三九年  
のナチス・ドイツのワルシャワ占領  
で、ワルシャワ市内にユダヤ人ゲッ  
トーが作られ、シュピルマンが姉弟  
や両親とともにゲットーに隔離され  
る。しかし、一九四二年に姉や両親  
は強制収容所へ向かう列車に乗せら  
れワルシャワを去る。女性や老人は  
強制収容所で処刑される運命にあり、  
若い男性はワルシャワのゲットーに  
留め置かれ、建設労働に従事させら  
れる。

シュピルマンは家族と一緒に強制  
収容所送りになるところ、知り合い  
のナチス親衛隊の隊長が列車に向か  
う列の中からシュピルマンを引きは  
がし命を救うが、ワルシャワの強制  
労働集団に入れられる。強制労働集  
団内部で反ナチの秘密組織が活動し

ており、蜂起の準備が行われる。蜂  
起が近づいたある日、秘密組織のメ  
ンバーの助言に従い、シュピルマン  
はゲットーから逃亡を図り、幾人か  
の知人やサポーターを経由して、隠  
れ家となるアパートに潜む。

やがて対ナチへの蜂起が始まり、  
連合軍の空襲も始まる。騒然とした  
状況の中、隠れ家になっている建物  
へのナチの砲撃が始まり、さらなる  
逃亡を余儀なくされる。シュピルマ  
ンは瓦礫になったワルシャワの街を  
転々としながら、破壊された家屋の  
屋根裏部屋に落ち着く。廃屋の中で  
食料を探している時に、若いドイツ  
人将校と出くわす。短い会話の中で、  
職業を聞かれ、「ピアニスト」と答え  
る。その将校はシュピルマンに、ピ  
アノ演奏を促す。演奏の後、将校は  
シュピルマンに食料と外套を渡し、  
立ち去る。

しばらくして、ワルシャワは連合  
軍によって解放され、ドイツ人将校



は敗走の途中に捕らえられ、捕虜となる。

## テーマ

題名「ピアノリスト」はこの映画の主題が音楽あるいは音楽家だと暗示している。筆者もまた、それを期待した。確かに、物語は実在のピアノリストであるシュピルマンとその家族の運命なのだが、映画の九割はユダヤ人シュピルマンのワルシャワでの出来事を綴っており、音楽が主題になっているわけではない。ドイツ人将校との出会いの場面がこの映画の売り物なのだが、映画全体の流れからすると、このシーンはナチからの迫害の過程の一つのエピソードにすぎない。したがって、音楽が主題だと考えると、期待外れになる。朝日新聞の映画批評で、ある音楽評論家が「廃屋のピアノから響くのは調律されていない音であるはずなのに、映画のピアノは完全に調律されてい

て、現実的でない」という趣旨の批判を寄せていた。確かにその点は不自然さを免れず、映画のリアリズムを損なっているが、逆にこの映画の主題が音楽にないことを示している。

それではこの映画のテーマは何か。

明らかに、「ホロコースト」である。ドイツ占領から解放までのワルシャワ・ゲットーを克明に描いた映画である。そのリアリズムは聴衆を震撼させるに十分である。過去の歴史的後景に流れ去りつつあるナチス・ドイツの蛮行を、若い世代が体験できるといふ点で、優れた作品だといえる。

他方、*Harrowood's Taking Side*

と比較すると、何か物足りなさを感じる。サボー・イシュトヴァーンが映画化した *Taking Side* はナチスと音楽家との葛藤を描くもので、派手な映像はないが、尋問の迫真性には見る者の生き様を問う厳しさがある。しかし、このような映画は現代

のハリウッド映画には向かない。厳しく思想を問うという姿勢や内容は、娯楽中心の世界の間尺に合わない。ハンガリーでの上映も、すでに打ち切られている。残念なことである。

## ヨーロッパとユダヤ人問題

それにしても、第二次世界大戦が終わって六十年にもなるうというのに、依然として、ナチスのホロコーストが芸術や思想の主要なテーマとして生きている。昨年ノーベル文学賞のケルティースの小説も、ナチの強制収容所が舞台だった。明らかに、ヨーロッパ社会がユダヤ人問題やナチス・ドイツによる虐殺を忘れて共存していけないことを教えている。それはたんに民族の共存だけでなく、ヨーロッパ社会が存続していくための思想的倫理的な問題なのだ。その再確認が繰り返し行われているのだと考えればよい。

そのことは、対イラク攻撃にたい

するヨーロッパ諸国の反応にも現れているが、その対応は一樣ではない。ヨーロッパ諸国の中でも、ポーランドは英国とスペインとは違った意味で、アメリカの対イラク攻撃支援で突出している。英国は石油メジャーの利害と国内部での特殊な立場（ヨーロッパ大陸から離れた島国で、かつ米国を生み出した母国）に規定されているし、スペインは首相のスタンドプレーであるが、ポーランドの対イラク攻撃支援政策は明らかに、五百万人とも七百万人ともいわれる在米ポーランド系ユダヤ人の意志が反映している。さらに複雑なのは、現在のポーランド大統領も首相も、旧体制時代のエリート共産党員だったという事実である。たんに支援を表明するだけでなく、戦闘要員を送るといふ選択をおこなった現在の政府の決定はどのような政治的意思あるいは思想的な意思にもとづいているのだろうか。個人的なスタンド

プレーとして八カ国声明に署名したチエコやハンガリーと違い、ポーランドは最初から確信犯なのだ。このポーランドの姿勢に、対ドイツへの対抗心やアラブ世界への蔑視が見え隠れすると考えるのは、筆者だけだろうか。

もつとも、政府の決定とは異なり、ポーランドでも世論の六割が対イラク攻撃反対なのは救われる。それにしても、ポーランド出身のローマ法王をいただき、ローマカトリックの強い影響力をもつポーランドで、法王の戦争反対を押し切って、政府がイラク攻撃を積極的支持する本当の意図はどこにあるのだろうか。

### 受賞スピーチ

対イラク攻撃開戦直後のアカデミー賞授賞式は波乱に満ちていた。アメリカの銃社会を告発するドキュメンタリー・フィルムで、ドキュメンタリー賞を獲得したムーア監督は、

激しいアジテーションで、ブッシュを批判した。「ニセの選挙で選ばれたニセの大統領よ、ニセの戦争の恥を知れ」と。会場は騒然としていたが、核心をついた発言だった。もつとも、会場で一番好意的に受け入れられたスピーチは、映画の体験にもとづき、戦争の悲惨さを訴えたエイドリアン・ブローデイのスピーチだったと報道されている。

それにしても、多くの受賞者が対イラク攻撃に反対スピーチをしたのには、それなりの理由がある。今、アメリカのブッシュ政権は、ネオコン（ネオコンサーヴァティブ）と呼ばれる超タカ派グループが牛耳っている。この現象を一九五〇年代初めのマッカーシズムによる左翼・進歩的知識人や芸術家のパージと重ね合わせ、芸術への政治の介入を危惧する映画人が多いということだ。

それに比べ、ポーランドやハンガリーの旧体制エリート政治家の腰の

軽さはどうだろう。彼らの軽さは、彼らの思想転向の容易さを象徴している。もつとも、旧体制時代から確固たる思想を持つていなかった考えの方が、良く理解できるかもしれない。

### 日本の特殊性

さて、このような状況下の日本はどうだろう。ドイツがこれでもかこれでもかと「ホロコースト」を批判され続け、ドイツ自らもその贖罪に努力しているのにたいし、日本はどうだろう。「いつまで昔のことを取り上げるのか。賠償で片が付いているではないか」と、中国や韓国の批判に取り合わない。日本の外交政策を取り仕切ってきた自民党のタカ派に、日本の軍国主義への反省はない。小泉首相だって、経済政策では必ず後退するのに、靖国参拝とアメリカ支持だけは頑強に堅持している。だから、保守本流は安心している。

東京裁判で戦争犯罪者が処罰されるはずだった。しかし、アメリカの戦後政策の転換で、戦争遂行の最高責任者である天皇の戦争責任が問われることなく、一切の責任は一握りの軍人に押しつけられた。一億総無責任化の始まりである。そして、極刑を逃れた多くの戦犯が刑期を満了することなく出所し、公職に復帰し、戦後の政界を牛耳り、それらの人々が戦後日本の政治と外交を担ってきた。

国民もまた、一部の軍人以外のすべての日本人は「被害者」なのだという錯覚に陥った。原爆投下もまた、アジアへの加害者から「被害者」への意識錯覚を助長した。国民がアジアへの加害者としての責任と意識を喪失しただけでなく、戦犯政治家が主導するアメリカへの政治的軍事的従属はアメリカ一辺倒の卑屈な外交姿勢を定着させてしまった。小泉首相のアメリカ無条件支持の絶叫は、

おかしくも悲しくもあるが、これが日本の姿だ。絶叫しなくても、分かっている。誰も驚いたり注目したりしない。

もつとも、日本がアメリカを支持しなかったら、大きな驚きをもたらさし、日本を見直させる転機になっただろうが、どこころんでも、今の日本にアメリカを立てる道化師の役割を超えることはできない。経済力は注目されても、国際政治や知的モラルで、日本はアメリカ以外の世界から相手にされていない。お金以外に日本は何も期待されていない。多分、アメリカの政治家も内心はそう考えているのだろう。

\* 映画「戦場のピアニスト」は、三月中旬より、ブダペストで上映中。日本では二月中旬より全国で上映中。

## ハンガリー日本人会事務所移転のお知らせ

二〇〇三年一月より下記に移転致しましたのでご連絡申し上げます。  
ハンガリー日本人会  
Magyarországi

Japánok Szervezete

Address: H-1054 Budapest V.

Zoltán u.13 I/1

Tel/Fax:

(+36-1)373-0400(代表)

e-mail address :

nihonjinkai@axelero.hu (代表)

なお、商工部会事務も同所で行う事になりました。

e-mail address:

shokobukai@axelero.hu (代表)



## 会社近況

### デンソー・ハンガリー

高坂 典孝

皆さん こんにちは。DENSOがどんな会社かご存知ですか？主に自動車部品を製造し世界各国の自動車メーカーとお付き合ひさせて頂いております自動車に興味のある方はトヨタ系の部品会社というイメージがあるかも知れませんが、フェラーリ、ボルシェ、ランボルギーニ等あこがれの車にも実はDENSO製品が搭載されています。空調関連、電子制御関連、エンジン関連部品等 車の見えない部分に搭載されているものがほとんどなのであまりお目にはかかれませんが、『環境にやさしい車』、『安全性の高い車』、『快適に運転できる車』実現のお手伝いをしています。このような分野でお客様のサポートを海外でも実現したいと考え、九七年にここハンガリーにも進出をいたしました。場所は Szekesfehervar です。BUDAPEST から南西に約六五km。

BUDAPESTと巴拉トン湖のほぼ中間に位置します。Szekesfehervarとは『玉座ある白い城』という意味で、歴代のハンガリー国王がこの地で戴冠、埋葬されました。フン族が中央アジアから移動してきた最初の街として知られ、大聖堂、遺跡公園など見所もたくさんあります。この拠点はエンジン周りの部品を扱っており、デンソー社内ではパワトレイン事業グループの拠点として、九九年五月からディーゼル噴射ポンプの生産を開始しました。今年からは更なる事業拡大を目指し、コモンレールシステム製品（世界最高圧180MPa）及びエンジン周り機能製品（燃費向上、排ガス規制対応）の生産もスタートさせました。事業拡大に合わせ従業員も増え、今年末には約千五百人規模に拡大予定です。日本人は現在二五名で、海外経験豊富な方から初めての赴任者までバラエティに富んでいます。家族も含めると約八名の大家族となりました。補習校近辺では「三河弁」が標準語になりつつあるという冗談も流れています